

題材【CASE3…底なし沼】

なぜ、こんなことになったのか。
気づいたときには、腰から下は、沼の中だった。
手の届く場所にある草木をつかんでも、
俺の体重を支えることはできず、
ブチブチと根元から抜けるだけ。
もがくほどに、泥が体を包み込んでゆく。
シヨベルカーでもない限り、
この窮地から逃れるすべはないだろう。
俺は、どうやら助かりそうにないようだ。
とうとう、泥は肩の高さにまで達した。

【応募作品】

「本当に底なし沼なのか？ ちゃんと確認しておかないと、
せつかく隠した死体が見つかったら面倒だぞ」
あいつはそう言っていた。
人を殺してしまった俺の神経は、ふつうじゃなくなっていた。
あいつの口車に乗せられて
本当に底なし沼かどうか、自ら足を突っ込んでみるなんて、
俺はどうかしていたんだ……。
徐々に感覚がなくなっていく手足とは逆に、
しだいに、頭には冷静さが戻ってくる。
あいつは興奮したふりをしていたが、
本当は冷静だったのだろう。
あいつ自身は、一切手を下さず、
彼女と俺をこの世から消すことに成功かけている。
体が沈めば沈むほど、思考はクリアになっていくが、もう遅い。
俺の鼻先が沈んだとき、奴の完全犯罪は成功した。